

漆水

漆水^(二)は扶風杜陽^(三)にある^(四)兪山^(五)から流れ出て、東北に向かい渭水^(六)に入る^(七)。

楊・漆水は(夏・殷・周の)三代の時に最も名が現れ、『詩経』『尚書』を讀むと、両書ともにこれを述べている。秦・漢時代以降、(比定される対象の)遷り変わることが多く、だから『漢志』はただ「漆水は)漆水の西にある」^(八)とだけいう。『説文』に「漆水は)杜陽にある岐山から出る」^(九)というのは、きつと古の『尚書』家の旧説から採っているであろう。鄭玄が『毛詩』に箋をつける時には、既に(漆水の位置を)詳しく明らかにすることができておらず、思うに(その時に漆水は)埋もれ滅び、ほとんど尽きていたのであろう。『水経』の作者は、その当時に漆水が存在しなかったため、ただ『山海経』と『説文』の文を混えて採り、これ(『経文』)を作ったのである。『水経』に「扶風杜陽から流れ出る」というのは、『説文』に基づいていて、その文に「兪山」というのは、『山海経』の^{ゆじ}兪次の山^(一〇)のことである。『水経』の文に「東北に向かい渭水に入る」というのは、東は『説文』を根拠とし、北は『山海経』を根拠としているのである。しかし、『山海経』と『説文』の)両書が述べる水と土地の位置は異なっており、両者を合わせて一つにすることはできない。しかも杜陽は渭水の北に

あるのだから、どうして漆水は東北に流れて渭水に入ることができようか。酈道元の時になるとさらに漆水の実際について調べようがないため、(この段落の)『注』文の末尾で漆渠をこれ(漆水)にあてるが(九)、(酈道元は)なお自信がなかった。惜しいことには酈道元の引く旧説は漆水について明らかにしておらず、さらに錯簡が多い。そのため今、以下の疏文を作った。

『山海経』に「兪次の山、漆水はここから出て、北流して渭水に注ぎこむ」(一〇)という。①思うに(『山海経』の「北流」とは「北に」ではなく)北から南に流れるということであろう。②。

①楊…これは『山海経』西山経の文である。その上文にいう浮山(二)は、『渭水注』の浮肺山で、麗山(驪山)に連なり、山名を異にするものである。今は臨潼県の南にある(二三)。さらに西方七〇里にあるのを、兪次の山といい、漆水はここから出て、北流して渭水に注ぎこむ(二三)。郭璞注に、「今の漆水(二四)は岐山から流れ出る(二五)」とある。思うに郭璞が岐山を兪次山にあてなかつたのは、華山、符禺山ふくぐの西に行っても岐山に到達しえないことを知っていたからであろう(二六)。だから岐山の漆水を引いて(『山海経』の漆水とは)異なることを明示したのである(二七)。考えるに(兪次山の位置する)臨潼県の西七〇里は、まさしく杜陵県と酈県の間にあたり、つまりこれは『注』の後文(五六三頁)が引用する『関中記』の「漆水、沮水は酈県にある」で、また後文(五六二頁)が引用する『開山図』の「岐川は杜陵の北にある」にあたる。だから(『山海経』は)「北に流れて渭水に注ぎ込

む」というのである。

②楊・酈道元が『山海経』の主旨を理解できていなければ、『山海経』の文を、『関中記』の前に並べることとはできない。他方、漆水を渭水の北にあるとするのであれば、北に流れて渭水に注ぎ込むことはできないので、北から南に流れると解釈しているのである。その（後世の）本意を曲げた附会の痕跡は、ほとんど大笑に値する。下文に引く『開山図』『関中記』は、明らかに『山海経』の句を「北流して渭水に入る」と解釈していることの証しである。どうして（酈道元が）「北から南に流れる」と記述するだろうか。これはきつと浅知恵の人が、ただ漆水が南に渭水に入り、北に渭水に入る道理がないことだけを知り、また『大遼水注』に「北から南に流れる」という文（二八）があることを見て、とうとうこれ（蓋自北而南）の文をこの『注』文の（下に竄入させたのである。各本には（ここに）「尚書禹貢」から「入于河」までの二六字があり（五九五頁）、さらに「孔安国曰」から「是符禹貢本紀之説」までの二六（二九）字がある（五九六頁）が、これは涇東の漆沮水であり、ここに錯簡として紛れ込んでいたので、今『沮水注』に移した（一〇）。

『開山図』（二二）に、「麗山の西北に温池（二三）がある^①。温池の西南八〇里に、岐川（二三）があつて、杜陵（二四）の北にある^②。長安の西に渠があり、これを漆渠（二五）という」（二六）とある。^③

①『箋』…古本は「地」に作り、呉本はこれを改めて「池」に作る（二七）。

戴・大典本は「池」に作る。

趙…(二八)『三秦記』(二九)と『漢武故事』(三〇)はともに「驪山湯泉」といい(三一)、また「温泉」と称し、「温池」とはいつていない。

楊…泉のことを池というのもまた差し支えない。

②全、趙、戴は「岐川」を改めて「岐山」に作る。また朱は「在杜陵埤」に作る。『箋』…宋本は「北」に作る。趙は誤って(五六六頁『注』文の)「許慎説文」の下の『箋』語の「孫云杜陵当作杜陽」八字を移して、(『箋』語の)「宋本」の上に合して一条の文とし、改めて「在杜陽北」に作る(三三)。

楊…これはつまり『関中記』の漆水が鄠県にあるという説である。温池の西八〇里が杜陵の北原にあたるということは、誤っておらず、岐川は漆水をいうのである。岐と漆は音が近い(三三)、だから『渭水注』に、「大道川は東南に流れて漆水に入る、つまり故の岐水である」とある。これがその(岐と漆の音が近いことの)証明である。全、趙、戴が「岐川」を改めて「岐山」とし、また「杜陵」を改めて「杜陽」としているのは、思うにここでのうのは杜陵にある別の岐川であり、杜陽にはないことを知らないからであろう。温池が岐山、杜陽を離れることは三〇〇里にとどまらない、まして八〇里であるはずもない(三四)。

③楊…「開山図」以下の三三字を、各本は「潘岳関中記」云々の下に誤って挿入しており、今ここに移した。

潘岳『関中記』に(三五)、「関中に涇・渭・灞・澹・酆^{れい}・鄠^{こう}・漆・沮の水(三六)がある^①。酆・鄠・漆・沮の四水は、長安の西南の酆^こ県にあり、全て【注酆、鄠水】(三七)北に向かい渭水

に注ぎこむ」という。^②

①楊…『文選』上林賦の李善注が引く潘岳『閔中記』に、「涇水、渭水、灊水、澗水、酈水、酈水、漆水、澗水、けつ澗水、合せて（閔中）八川」とある。『初学記』が引く『閔中記』も同じである（三八）。これは酈氏の見た『閔中記』が李善、徐堅の見た（『閔中記』の）本と異なっているのである。『初学記』がまた引く『閔中記』に、「涇（三九）水と渭水、洛水とが閔中三川である」という。（『初学記』が）また引く『閔中記』に、「洛水は別名漆沮水（四〇）、馮翊から流れ出る」という（四一）。つまり『閔中記』には涇東と渭南の両方に漆沮水があるのである。

②戴氏は「皆注酈鄗水北注渭」に「漆沮」を増して「漆沮皆南注酈鄗水皆（四三）北注」に作り、「渭」字を削る。楊…（『閔中記』は）既に（酈、酈、漆、沮の）四水は全て酈県にあるといっている。だから当然四水は全て北流して渭水に入るはずである。どうして漆沮水を南に注ぐと改めることができようか。「渭」字を削るのであれば、漆水、沮水はいったいどの水に注ぐのだろうか。私（楊守敬）が思うに「注酈酈（四三）水」の四字は衍文である。「潘岳閔中記」から以下（四四）の文を、各本は「開山図」云々の上に誤って挿入しており、今ここに移した。以上ここまでの『注』文は全て『山海経』の「北流」して渭水に注ぎ込む」の文の解釈であり、以下の『注』文でようやく涇西の水を解釈する。

周太王は邠ひんを去り、漆水を渡り、梁山を越え、岐山の麓に留まった（四五）。故に『詩経』に、「民が初めて誕生し、杜・沮漆水（の地）に行った」という。^①また（続けて）「西水

(Ⅱ 沮漆水) のほとりに沿って行き、岐山の麓に至った」(四六) という^②。

① 《朱は誤って「漆沮」に作り、戴は「沮漆」に作り、趙は『経』文に拠って字を入れ換える。
熊・黄本は「沮漆」に作る。》

② 楊…これは涇西の漆沮水である。『括地志』に、「梁山は好畤^{こうし}県の西北(四七)一八里にある(四八)」とある(四九)。
今の乾州(陝西省咸陽市乾県)の北一〇里にある。岐山は今の岐山県(陝西省宝鸡市岐山県)の東北五〇里にあり、杜水の南にあるため、『詩経』に「杜・沮漆水(の地)に行った」というのは、北から南に行ったのである。地望によってこれを推測すると、おのずから先に梁山を越えて、その後で沮漆水を渡ったはずである。しかし『史記』が先に沮漆水を渡り、その後で梁山を越えるとするのは、漆水が杜水の北にあり、東南に流れて梁山の東を過ぎることで初めて可能となるはずで、明らかに『詩経』の文と合わない。考えるに『孟子』はただ「梁山を越えて岐山の麓に至る」(五〇)とだけいい、『呉越春秋』もまた「梁山を越えて岐に居る」(五一)とだけいい、漆水を渡ったことには言及していない。疑うに太史公は『詩経』の「杜・沮漆水(の地)に行った」という文に基づいて、これ(沮漆水を渡ったこと)を増して文に入れたが、その道理を考える暇がなく、とうとうこのように先後を倒置してしまったのではないか。「周太王」から以下の文を、各本は(後の)「許慎説文」の文の上に誤って挿入しており、今ここに移した。

班固の『漢志』に(五二)、「漆水は漆県(五三)の西にある」(五四)という。

楊・『統漢志』に、「漆県に漆水がある」(五五)とある。『統漢志』の劉昭注が引く『地道記』に、「漆水は漆県の西にある」(五六)とある。ともに『漢志』に基づいている。

闕駟かんいん『十三州志』にまた、「漆水は漆県西北の岐山から流れ出て、東に向かい渭水に入る」という。

楊・『尚書正義』が引く『十三州志』は同じである(五八)。しかし(私は)これに異論がある。岐山はどうして漆県の西北にあることができようか。故に王応麟(伯厚)『詩地理考』は「岐山」の文字の上に「至」字を増している(五八)。趙、戴はともにこれに従っている。(しかし彼らは)漆県が今の邠州であり、その西北は涇水の北であることを知らない。しかも『漢志』で「至」というものは全て、必ずその近い地に入っている。岐山は漆県の西南にあるので、「至」字を入れたら)どうして「東に向かい渭水に入る」ということができようか。ここ(『十三州志』)は「漆水は漆県の岐山の西北から流れ出て、東に向かい渭水に入る」というべきであり、『漢志』の例に依拠した文体とまさしく合致する。晋の時には既に杜陽県はなく、漆県に併合されており、だから闕駟は「漆県の岐山」ということができたのである(五九)。

許慎『説文』に、「漆水は右扶風杜陽県①にある岐山から流れ出て、東に向かい渭水に入る。水②に従い、漆しつの聲。一に(六〇)、漆は、城池(という意味)である」という(六一)とある。

《①朱は誤つて「杜陵」に作る。『箋』…孫汝澄は「杜陽」に作るべきであるという。趙、戴は改める。》

②楊…今本の『説文』が「杜陵」に作るの誤りである。この『注』文によって訂正すべきである。大徐本が「一曰入洛」に作るの誤りである。これは小徐本も同じく誤っている（六二）。「許慎」から以下の文を、各本は「潘岳関中記」の文の上に誤つて挿入しており、今ここに移し、下の「水出杜陽県」の文と接するようにした。

今、杜陽県にある岐山の北の漆溪から流れ出る水があり、これを漆渠（六三）といい、西南に流れて岐水に注ぎ込む。

楊…これは酈氏の語である。胡渭（東樵）は誤つて鬪駟の説とみなしている（六四）。（岐水の）下流が雍水に入つて、そこから渭水に入ること、は、『渭水注』にもみられる（六五）。

しかし、（漆水の）川の流れと土地の差異は大きく、①、今、諸説が入り雑じつて出て、これを經史に照らして考えると、それぞれ根拠がある。（自分は）知識が浅く、意見も浮つているので、これを弁別することができない②。

①楊…（漆水に対する諸説の）変遷を解説したのである。

②楊…今本の『漆水注』は『詩經』『尚書』の説に明るくなく、錯簡があつて、さらに秩序だっていない。『山海經』『関中記』『開山図』（の記述）はいずれも杜陽の水を述べることができていないが、今訂正を加えると、いささか筋が通るようになる。（酈道元が）漆渠の水を杜陽の岐山（より發する水）に（六六）擬するのは、古人の本意

には違わない。しかし、その流れる距離はとても短く、しかも『漢志』の（漆水は）漆県の西にあるという文の主旨と非常に符合するというわけでもない。『元和志』『寰宇記』が、邠州西の白土川水が東北（六七）に流れて涇水に入るのをこれ（漆水）にあて、しかも南流の漆溪を反駁して斥け、漢代の水ではないとする（六八）に至っては、思うに『漢志』の「（漆水は）漆県の西にある」という文に附会しようと思ひ、また『水経』の「（漆水は）東北に流れる」という文に惑わされたのであり、『説文』は明らかに「渭水に入る」といい、『山海経（六九）』もまた「渭水に入る」といつていることを知らないだろう。どうして涇水に入る水をこれ（漆水）にあてることができようか。『隋志』は普潤（県）の条に「漆水がある」という（七〇）。普潤は今の麟游県の西一〇〇余里にあり（七一）、『漢志』の「（漆水は）漆県の西にある」という文と適合し、また「杜陽にある岐山から流れ出る」という文に反しないので、これは受け入れられるだろう。惜しいことには今、他の書籍でこれを詳しく証明するものがないだけである。『隋志』は「あるいは「普潤は、もと漢の杜陽県であり（七二）、故に漆水があるという」といいたいであって、必ずしも別に基づく所があるわけではないのかもしれない（七三）。

楊・漆、沮はもと双声字であり（七四）、「漆」（二文字だけ）をいつて「沮」を兼ねることができ、「沮」（一文字だけ）をいつて「漆」を兼ねることができる。しかし『漢志』『説文』に漆水と沮水の二水がある（七五）のは、（以下の理由による。）『尚書』に「過ぎる」とある漆沮水は涇東にあり（七六）、『漢志』『説文』の沮水もこの涇東の水であつて、故に（涇東には）沮水（だけ）を扱つて漆水は論じない。そして『詩経』の漆沮水は涇（七七）西にあり、

『漢志』『説文』の漆水もこの涇西の水であって、故に（涇西には）漆水（だけを）とって沮水は論じない。これはそれぞれ（の漆沮水）が（漆か沮の）一字を挙げて（漆沮水を示して）いることの証しである。孔穎達・司馬貞・程大昌・王応麟はこのことを知らなかったので（七八）、様々に疑いを抱いて（論を立てた）（七九）のである（八〇）。

（一）漆水については(A)『詩経』『尚書』にみえる漆水、(B)『水経』にみえる漆水、(C)『水経注』にみえる漆水（漆渠水）の三つが存在し、それぞれの漆水は必ずしも一致するとは限らない。そこで三者についてそれぞれ説明すると、(A)の漆水は『詩経』『尚書』中に沮水と並列の形で登場する。この漆水及び沮水の位置について歴代の学者が様々な説を述べているが、例えば加藤常賢『書経上』（明治書院、一九八三）の「漆沮」に対する語釈が、「漆沮は一水の名とする説と、二水の名とする説とあり、また、同じ雍州に別に漆沮水があるとする説があり、経学上の一大疑案である」（八三頁）と述べるように、「漆沮」の位置をめぐる議論は紛々としている。楊は『尚書』の「漆沮」と『詩経』の「沮漆」をそれぞれ別の漆沮水であるとみなし、前者を『注』の沮水、後者を『注』の漆水であると考えた。そして、『注』の漆水を、『隋志』普潤県の条にみえる漆水にあてる（五六七頁疏文参照）。また、卷一六『沮水注』にみえる漆水は楊の考えによれば『尚書』の漆沮水を指す。

(B)の漆水については、楊疏文が指摘するように渭北の杜陽県の山より発するという記述と、東北に流れて渭水に入るといふ記述とは明らかに矛盾している。そのため、楊守敬は『水経』成書当時に既に(A)の漆水は滅び、『水経』の

記述は『山海経』と『説文』の記述を整理せずに載せたものにすぎないことを主張しており、つまり(B)の漆水は『水経』成書当時の実在の河川ではないという。一方、『校箋図釈』は、『説文』にみえる漆水は後述の(C)の漆水と一致しており、『水経』の記述は、(C)の漆水を述べていたものに誤って『山海経』の「北入于渭」の記述を投影させてしまった結果であることを主張している(上巻二四七頁、以下「上巻」は略す)。つまり(B)の漆水は、実在する河川(C)の漆水に一致)を元とし、『水経』の成書過程でそこに誤った記述が挿入されてしまっただけだという。

(C)の漆水は、酈道元が(A)の漆水ではないかと推測する河川であり、巻一八『渭水注』中にもみえる。『校箋図釈』はこれを今の陝西省宝鸡市鳳翔県北部を流れる潤渠河にあてる(後注(六三)参照)。なお、実際に(A)の漆水と(C)の漆水が一致するかどうかは不明であり、酈道元自身も(A)∥(C)の自説に自信がないことを『注』で述べている。

(二) 杜陽県故城は今の陝西省麟遊県招賢鎮付近か。杜陽県は漢代には右扶風に属し、晋代に廢された。

(三) 『校箋図釈』は、兪山を今の陝西省麟遊県西亭鎮南側の山地とする(二四八頁)。一方、『山海経』の兪次山は楊守敬の指摘するように渭水以南に位置する山であり、兪山と兪次山は一致しない。

(四) 底本は「于」を脱する。台湾本・楊守敬集・江蘇本は「于」を補い、台湾本は欄外に「初稿有于字」と記し、楊守敬集の校注は「原脱于字、各本皆有、今補」と述べる。

(五) 江蘇本はこの一文を台頭扱いしておらず、『注』との区別がなされていない。

(六) 五六五頁の『注』文参照。

(七) 五六六頁の『注』文参照。

(八) 五六一頁の『注』文参照。

(九) 五六七頁の『注』文参照。

(一〇) 『山海経』西山経に「又西七十里、曰隸次之山、漆水出焉、北流注于渭」とある。

(一一) 『山海経』西山経「又西七十里、曰隸次之山、漆水出焉、北流注于渭」の前文に「又西百二十里、曰浮山」とある。

(一二) 卷一九『渭水注』下に「渭水又東、冷水入焉。水南出肺浮山、蓋麗山連麓而異名也」とある。浮肺山は、肺浮山、肺浮山ともいい、卷一九『渭水注』下によれば冷水（現在の零河）の水源である。この水源は現在の西安市臨潼区と渭南市臨渭区の境界に位置する高家嶺の東北麓であり、浮肺山はこの高家嶺を主とした山を指すと思われる。麗山は驪山のことであり、今の陝西省西安市臨潼区東南に位置する標高一三〇二メートルの山である。

(一三) 前注（一〇）参照

(一四) 底本・台湾本・楊守敬集は「水」を脱する。江蘇本は「水」を補う。次注（一五）参照。

(一五) 『山海経』西山経「漆水出焉」の郭璞注に「今漆水出岐山」とある。

(一六) 『山海経』西山経は華山を起点として西に移動しながら山を叙述する。故に楊守敬は岐山が華山や符禺山の西にないことを採りあげる。岐山は岐山県北に位置する標高一六五一メートルの山である。華山は中国の聖山五岳の

一つ「西岳」として名高い。東西南北中の五峰のうち、最も高い南峰は二一五五メートル、山全体が華山風景区となっている。符禺山は卷一九『渭水注』下にもみえ、その疏文に「(符禺)山在今華州西南、水即州西之遇仙橋河也」といい、現在の陝西省渭南市華州区に位置する。

(一七)『山海経』西山経にみえる「漆水」について、『校箋図釈』は、漆と潦は字形が近く、潦水(＝澇水)を指すのではないかと指摘する(二四七頁)。

(一八)卷一四『大遼水注』に「地理志曰、渝水首受白狼水、西南循山、逕一故城西、世以為河連城、疑是臨渝界之故城、王莽曰馮德者矣。渝水南流東屈、与一水会、世名之曰檻倫水、蓋戎方之變名耳。疑即地理志所謂侯水北入渝者也。十三州志曰、侯水南入渝。地理志蓋言自北而南也」とある。

(一九)江蘇本は「二十六」を「六十二」に作る。

(二〇)『水経注疏』より前の『水経注』諸版本と『水経注疏』ではこの『注』文が大きく異なっている。これは楊守敬が『注』文を大幅に入れ換えたためで、両者を対照しやすいように文に(A)～(I)の番号を付けると、『水経注疏』より前の『漆水注』本文はおおよそ以下のようになっていた。「(A)山海経曰、隄次之山、漆水出焉、北流注于渭。蓋自北而南矣。(B)尚書禹貢、太史公禹本紀云、導渭水東北至涇、又東逕漆、沮、入于河。孔安国曰、漆、沮、一水名矣。亦曰洛水也。出馮翊北。(C)周太王去邠度漆、踰梁山、止岐下。故詩云、民之初生、自土沮漆。又曰、率西水滸、至於岐下。(D)是符禺貢本紀之説。(E)許慎説文称、漆水出右扶風杜陽界岐山、東入渭、従水、漆声。又云、一曰、漆

城池也。(F)潘岳関中記曰、関中有涇、渭、灞、瀨、鄠、鄠、漆、沮之水、鄠、鄠、漆、沮四水、在長安西南鄠県、皆注鄠、鄠水北注渭。(G)開山図曰、麗山西北有温池。温池西南八十里、岐川在杜陵北。長安西有渠、謂之漆渠。(H)班固地理志云、漆水在漆県西。闕駟十三州志又云、漆水出漆県西北岐山、東入渭。(I)今有水出杜陽県岐山北漆溪、謂之漆渠、西南流注岐水。但川土奇異、今說互出、考之經史、各有所拠、識淺見浮、無以弁之矣」(大典本・呉本・朱・全・趙・戴を参照。各本の細かな文字の異同については言及しない)。

楊守敬はこの『注』文を(A)↓(G)↓(F)↓(C)↓(H)↓(E)↓(I)と並び替え、また(B)と(D)の文を『沮水注』に移している。

(二一)『開山図』については、『隋書』経籍志三に「遁甲開山図三卷 柴氏撰」「遁甲開山図一卷 梁遁甲開山経図一卷」とある。また『旧唐書』経籍志下には「遁甲開山図一卷 王琛撰」「遁甲開山図二卷 柴氏撰」とある。また『新唐書』芸文志三には「遁甲開山図一卷」「柴氏遁甲開山図二卷」とあり、柴氏の撰にかかる三(二)巻本と王琛による一卷本の二種類が存在したことがわかる。

(二二)麗(驪)山温池は驪山温泉ともいう。唐代に華清宮内にあったことから、華清池に改称され、白居易「長恨歌」において楊貴妃が湯浴みを行った場所として有名である。

(二三)『開山図』の岐川は渭南にあり、渭北の岐山ないしその付近を水源とする川とは考えられない。『校箋図釈』は、『注』の「岐川」を残宋本が「岐川」に作ることを指摘した上で、「岐川」に作るのがよいのではないかと述べ、この岐川は杜陵の北で歧出する川を指し、卷一九『渭水注』下の「両川」と関係があるのかもしれないという(二)

五〇頁)。この『渭水注』下の「霸水又北会両川」について、楊は「両川当在今咸寧県東北」といい、『校箋図釈』は「両川は現在対応する水道がない。按ずるに、漚さえ、灞は二水が交わる所から、王莽九廟に至るまでの間に霸水に入る河川はない。『渭水注』の前文に「荆溪水乱流注于霸」といい、ここから荆溪水（長水）が霸水に入る所には多くの河道があり、思うにこの「両川」とは荆溪水と霸水が交わる所の荆溪水の枝津ではないか。もしそうであれば、それは今の漚河が灞水に入る所のやや南であり、この両川は荆溪水の北に位置する」という（一八四頁）。一方で『校箋図釈』には、岐川は漚水を指すのではないかという見解も述べており（二五一頁）、上記の見解とは若干異なる所がある。

(二四) 杜陵県は今の陝西省西安市東南にある。もと秦の杜県で、前漢の宣帝の時に、宣帝がここを自らの陵墓に定め、杜陵県に改められた。晋代に杜城県に改称され、北魏の時には杜県となり、北周のとき万年県に併合された。

(二五) 漆渠について、『校箋図釈』は、交水（今の陝西省西安市長安区の洩河）を北出する渠であり、『豊水注』（現行本には存在せず、『校箋図釈』がこれを輯する）の「漢故渠」である（『長安志』巻二二が引く『注』）と指摘する（二五一頁）。

(二六) 『漢唐地理書鈔』所収の『開山図』輯本では「麗山西北有温池」の一文のみを収録する。一方、『宋元方志叢刊』所収の宋敏求撰『長安志』巻一二長安「漢書曰、漢穿渠通漆水、故曰漆渠」の畢ひつげ沉注は「括地志曰、胡亥将運南山之漆而開此渠。沉案、漢書無此文、蓋敏求誤引耳。又案、水経注云、開山図曰、麗山西北有温池、温池西南八

十里、岐山在杜陵埽。有渠、謂之漆渠。即此而胡亥事則不知所本」といい、「漆渠」までを『開山図』の文として引く。文脈から判断するに、「漆渠」までを『開山図』の文と考えた方が穏当であろう。

(二七)「朱箋云、古本作地、呉本改作池」(江蘇本)を底本・楊守敬集は「朱本池作地、呉本作池」に作り、台湾本は「朱箋曰、古本池作地、呉本改作池」に作る。『箋』には「古本作温地、呉本改作温池」とあるので、江蘇本に従う。

(二八)江蘇本は「趙云」の二字を脱する。楊守敬集は「趙云」の二字を残す一方で、その校注に「上引趙云内容、核水経注釈及水経注箋刊誤均無、而朱箋語与此疏文同、故趙云当為箋云之誤。台湾本亦誤作趙云」と述べる。確かに趙本・趙『刊誤』に「趙云」以下の文はなく、『箋』には当該文(最後に「也」を加える)が存在しており、楊守敬集校注の指摘は正しい。一方で「戴云、大典本作池」の文は『箋』にはないので、江蘇本のように「趙云」を削除して、「守敬按」以前の疏文①を戴の言とすることも適切ではない。引用の正確さを重視するならば、「趙云」以下の「三秦記及漢武故事並云、驪山湯泉、又称温泉、不言温池」の文は「戴云」の箇所に置くべきということになる。

(二九)『三秦記』は漢・辛氏撰。『漢唐地理書鈔』によれば辛氏は漢代の隴西の大姓であるがその名はわからないという。『隋書』経籍志には記載がなく、現在でも佚文が残るのみである。

(三〇)『漢武故事』は『漢武帝故事』ともいい、撰者は諸説あって定まっていない。内容は前漢の武帝に関する志怪

小説である。

(三一) 『初学記』 卷七驪山湯第三に引く『三秦記』に、「辛氏三秦記云、驪山湯、旧説以三牲祭乃得入、可以去疾消病」とあり、『漢武故事』に「驪山湯、初始皇砌石起宇、至漢武又加修飾焉」とある。

(三二) 『箋曰』 以下について、底本・楊守敬集は「孫云、当作杜陽埤、宋本作北字。全、趙、戴改在杜陽北」に作り、台湾本は「孫云、当作杜陽埤、宋本作北。趙誤移許慎説文句下箋語孫云杜陵当作杜陽八字、於宋本上合為一条、改作在杜陽北」に作る。『箋』は『注』文の「岐川在杜陵埤」の下に「宋本作北」と記し、『注』文の「許慎説文称、漆水出右扶風杜陽県」の下に「孫云杜陵当作杜陽」の八字を記すが、趙『刊誤』は『注』文の「岐川杜陵埤」の下に「箋曰、孫云、杜陵当作杜陽埤、宋本作北。一清按、岐川字亦誤、当作岐山、見渭水注」と二つの『箋』語を誤つてくっつけて記しており、江蘇本の記述が正しい。今これに従う。

(三三) 「岐」字は中古以前の音では声母が牙音の群母、「漆」字は中古以前では声母が齒頭音の清母であり、調音位置が異なり、音が近いとはいえない。一方、楊守敬当時の北京官話では、「岐」は「tɕʰi」の陽平声（≠現代北京音の「qí」）、「漆」は「tɕʰi」の陰平声と推定され（≠現代北京音の「qí」）で音が極めて近い。おそらく楊守敬はこれを根拠として、「岐」「漆」両字の音が近いといっているのであろう。

(三四) 驪山温池から杜陽までが直線距離で約一五〇キロメートル、驪山温池から岐山までが直線距離で約一三〇キロメートルある。「里」を清代の一里≡五七六メートルで考えても、八〇里は約四六キロメートルであり、楊守敬の

指摘するように驪山温池と杜陽、岐山の距離が八〇里というのはあてはまらない。

(三五) 底本は「日」を脱する。台湾本・楊守敬集・江蘇本は「日」を補い、台湾本は欄外に「初稿有日字」と記す。

(三六) 涇・渭・灞・澇・酆・鄠はそれぞれ涇水・渭水・灞水・澇水・酆水・鄠水を指し、漆は後注(三八)に述べるとの対応関係を考えれば澇水を指すものと考えられる。

(三七) 江蘇本は「注酆、鄠水」の四字を()内に入れていて、削除すべき字として扱っているようである。その根拠となるのは楊疏文②であり、詳しくはそちらを参照。

(三八) 上海古籍出版社本『文選』卷八司馬相如「上林賦」の李善注が引く『関中記』には「涇・灞・澇・酆・鄠・潦・澇、凡八川」とあり、中華書局本『初学記』卷六涇水が引く『関中記』には「涇与渭・洛為関中三川、与渭・灞・澇・澇・灞・澇・酆・澇為関中八水」とあり、楊疏文において「漆」にあたる部分がそれぞれ「潦」「澇」「灞」(両者とも澇水を指す)になっている。この「漆」と「潦」「澇」の関係については、『山海経』西山経にみえる「漆水」を、『校箋図釈』が、字形の近似より潦水(≡澇水)ではないかと指摘するのが参考になる(前注(一七)参照)。おそらくこの『注』文にみえる「漆」とは「潦(澇)」のことであろう。潘岳『関中記』は『旧唐書』経籍志上にみえ、一卷。佚文が劉緯毅『漢唐方志輯佚』(北京図書館出版社、一九九七)等に収められている。

(三九) 底本は「涇」を「徑」に作るが、台湾本・楊守敬集・江蘇本が「涇」に作るのに従う。

(四〇) ここにいう「漆沮水」は洛水に注ぎこむ『尚書』の漆沮水(『注』の沮水)を指し、『注』文が引く『閔中記』にみえる閔中八水の漆水、沮水とは別の河川である。

(四一) 『初学記』卷六渭水が引く『閔中記』に「渭与涇洛、一名漆沮水、一名洛水、出馮翊」とある。

(四二) 台湾本は「皆」を「在」に作る。

(四三) 底本・台湾本・楊守敬集は「鄙」を「鎬」に作るが、江蘇本が「鄙」に作るのに従う。

(四四) 底本は「下」を「本」に作るが、台湾本・楊守敬集・江蘇本が「下」に作るのに従う。

(四五) 『史記』周本紀に「(古公)乃与私属遂去豳、度漆・沮、踰梁山、止於岐下」とある。邠は豳のことで、今の陝西省咸陽市彬縣びんけん付近である。

(四六) 『詩経』大雅、縣に「縣縣瓜瓞。民之初生、自土沮漆。古公亶父、陶復陶穴、未有家室」「古公亶父、来朝走馬。率西水滸、至于岐下。爰及姜女、聿来胥宇」とある。

「自土沮漆」の「土」字に関して、毛伝は「土、居也」というが、卷一八『渭水注』中の「故地理志曰、県有杜水」に対する疏文に、趙、戴の言を引用して「按漢志右扶風杜陽県、杜水南入渭。詩曰、自杜。師古曰、大雅縣之詩曰、人之初生、自土沮漆。齊詩作杜、言公劉避狄而来、居杜与漆沮之地」と述べており、楊守敬は『漢志』杜陽県の条の顔師古注引く齊詩に従って、当該文の「土」を杜水と解釈し、「自土沮漆」を「杜・漆沮水(の地)に行った」と解釈する。ここにおける杜水は卷一八『渭水注』中に「姜水ニ岐水)与雍水合而東、会美陽県之中亭川水也。水発

杜陽県大嶺側、(中略) 俗名大横水也。疑即杜水矣。其水東南流、東逕杜陽県故城、東西三百步、南北二百步、世謂之故県川。又故県有杜陽山、(中略) 故県取名焉、亦指是水而撰目矣。即王莽之通杜也。故地理志曰、県有杜水」という中亭川水を指す。『校箋図釈』は、この中亭川水を今の陝西省中部を流れる漆水河にあてる(一〇三頁)。

なお『詩経』の「率西水澗」に関して、毛伝は「率、循也。澗、水厓也」といい、これを承けて鄭箋は「循西水厓、沮漆側也」という。つまり、西水とは沮漆を指すと思われる。

(四七) 底本・台湾本は「西北」を「西」に作る。楊守敬集・江蘇本は「西北」に作り、楊守敬集の校注は『括地志』の文(後注(四九) 参照)に拠って訂正することを述べる。楊守敬集・江蘇本の訂正に従う。

(四八) 底本は「在」を「存」に作り、台湾本は「在」を「作」に作る。楊守敬集・江蘇本は「在」に訂正し、楊守敬集の校注は『括地志』の文(次注(四九) 参照)に拠って訂正することを述べる。楊守敬集・江蘇本の訂正に従う。

(四九) 『史記』周本紀「踰梁山」の句に対する『正義』に引かれる『括地志』に「梁山在雍州好時県西北八十里」とある。好時県は漢代に置かれ、北周の時に廃止された。県治は現在の陝西省咸陽市乾県の東である。

(五〇) 『孟子』梁惠王下に「大王 去邠、踰梁山、邑于岐山之下居焉」とある。

(五一) 『呉越春秋』呉太伯伝に「古公乃杖策去邠、踰梁山而処岐周」とある。『呉越春秋』は、三九二頁注(一一) 参照。

従水漆声」とあり、段玉裁注本に「漆水。出右扶風杜陵岐山、東入渭。従水漆声。一曰、漆、城池也」とある。いずれも「杜陽」を「杜陵」に作る（疏文も参照）。ただし、段注本は漆の補注に「漆水。出右扶風杜陽岐山、東入渭。一曰、入洛。一曰、漆、城池」という説解を記しているが、これは『水経注』に基づいた補注である。右扶風に杜陵はないので、杜陽にするのが正しい。

(六二) 前注(六一) 参照。

(六三) 漆渠水について、『校箋凶積』はこれを今の陝西省宝鸡市鳳翔県北部を流れる潤渠河にあてる(二四七頁)。

(六四) 胡渭『禹貢錐指』卷一〇に「關駟云、有水出杜陽峽岐山北漆溪、謂之漆渠、西南流注岐水」とある。

(六五) 卷一八『渭水注』中に「岐水又東逕姜氏城南為姜水。(中略)与雍水合而東、会美陽縣之中亭川水也。(中略)

又南逕美陽縣西。(中略)其水又南流注于渭」とある。

(六六) 江蘇本は「水」の下に「出」を加える。

(六七) 底本・台湾本・楊守敬集は「北」に作る(次注(六八)に引く『寰宇記』参照)が、江蘇本が「東北」に作るのに従う。

(六八) 『元和志』卷三邠州に「漆水在今縣西九里、西北流注於涇」とあり、『寰宇記』卷三四邠州・新平県に「漆水、按鄜道元注水経云、漆水自宜禄界界来、又東過扶風漆県北。以水経驗之、即邠州所理是也。漢志注云、漆水在県西。今縣西九里有白土川水、東北流逕白土原東、陳陽原西、又東北流注于涇水、或恐白土水是漢之漆水、但古今異名耳。

今鳳翔府東北一百六十里麟游県東南亦有一漆水、南流与杜陽水合、非漢之漆水也、故举此以明之」とある。

(六九) 底本・台湾本は「経」を脱する。楊守敬集・江蘇本は「経」を補う。

(七〇) 『隋志』上・普閩県に「大業初置。有仁寿宮。有漆水、岐水、杜水」とある。

(七一) 普潤県は普閩県ともいい、隋代に置かれ、元代に廢された。普潤県故城は現在の陝西省麟遊県西にある。

(七二) 『路史』卷二九夏世侯伯に「鳳翔普潤、漢杜陽地、有杜水」とある。

(七三) 底本は「也也」に誤るが、台湾本・楊守敬集・江蘇本が「也」に訂正するのに従う。

(七四) 双声とは漢字二字の熟語で、それぞれの字の声母が同じであること。「漆」と「沮」(沮は『広韻』には五つの字音が記されているが、ここでは沮水を意味する沮の字音をいう)は中古音でも上古音でも共に清母に属しており、確かに両字は双声字である。

(七五) 本「漆水」条のほか、『漢志』下・直路県の条に「沮水出西、東入洛」とあり、『説文』水部、澶の条に「水。出北地直路西、東入洛。従水虚声」とある(『説文』の、澶の条が『注』の沮水を指すことは五九三頁以下の疏文を参照)。

(七六) 『尚書』禹貢に「黑水、西河惟雍州。弱水既西、涇属渭汭、漆沮既從、澧水攸同」とあり、また「導渭自鳥鼠同穴、東会于澧、又東会于涇、又東過漆沮、入于河」とある。

(七七) 底本は「涇」を「逕」に作る。台湾本・楊守敬集・江蘇本は「涇」字に作っており、これに従う。

(七八) 孔穎達、司馬貞、程大昌、王応麟はいずれも『詩経』や『尚書』にみえる「漆沮」ないし「沮漆」に関して自己の解釈を提示している。

孔穎達は『尚書正義』及び『毛詩正義』でそれぞれ『尚書』の「漆沮」、「詩経」の「沮漆」を解釈している。そして漆沮を二水とした上で、『尚書』の「漆、沮」と『詩経』の「沮、漆」を別の水とみなし、『尚書』の漆水、沮水は、涇東にあり、『詩経』の漆水は『漢志』を引いて漆泉西の水、沮水はわからないとする。

司馬貞は『史記索隱』において、『尚書』禹貢の記述に基づいた『史記』夏本紀「漆沮既從、澧水所同」の一文に「漆、沮二水、漆水出右扶風漆泉西、沮水地理志無文、而水經以澧水出北地直路泉、東過馮翊葭州入洛。説文亦以漆、沮各是一水名。孔安国独以為一、又云是洛水。澧水出右扶風鄠泉東南、北過上林苑」という注釈を付け、『尚書』禹貢の「漆沮」を二水とする。

程大昌は『雍録』卷六において雍州の地にみえる複数の漆、沮、特に漆水について詳細な分析を加えている。その論旨を要約すると、『尚書』の「漆沮」、「詩経」の「沮漆」をそれぞれ漆・沮の二水とみなし、『尚書』の漆水・沮水は、富平泉石川河の本流（沮水）と支流（漆水）、『詩経』の沮水・漆水は、漆水を普潤の水、つまり『漆水注』の漆渠水とし、沮水の位置についてはほとんど言及していない。

王応麟は『詩地理考』において諸家の意見を引用する形で「沮漆」に対する解釈を提示している。特に『詩地理考』卷四が段昌武の意見を引用する形で「段氏曰、沮漆有二、皆出雍州、皆東入于渭、特有上流、下流之別。詩漆

沮入於渭之上流、書漆沮入於渭之下流。十三州志云、漆水出漆界西北、至岐山東入渭。後漢注、漆界故城在邠州新平界。沮水、不知所在。此詩自土沮漆者也」といひ、『詩経』の沮水・漆水と『尚書』の沮水・漆水を、それぞれ別の河川とみなし、前二者を渭水の上流に合流する河川、後二者を渭水の下流に合流する河川とみなしていたようである。

このように孔穎達・司馬貞・程大昌・王応麟の説はいずれも、『尚書』の「漆沮」を涇東の漆沮水（『注』の沮水）、『詩経』の「沮漆」を涇西の漆沮水（『注』の漆水）とする楊守敬の見解とは反している。

（七九）底本は「故」に作る。台湾本・楊守敬集・江蘇本は「致」に作る。

（八〇）以上の漆水篇の記述は、漆水の比定に関わる議論で終始している。その大要は、まず、(I)『山海経』『開山図』『関中記』が記す渭水の南にあるという説について述べる。次に、(II)涇水の西方にあるという説について『漢志』『十三州志』『説文』の記述が述べられている。それを承けて酈道元は、(III)杜陽界の漆渠を候補として挙げるが、自信はないという。楊は(III)に一定の評価を与えるが、流れが短すぎるなどの問題があるとし、『隋志』の普潤界にある漆水を挙げる。これは前注（一）で分類した(A)と(C)説と並べると(D)説ということになる。